

## 座長のまとめ

佐藤良暢（神戸常盤短大）

副鼻腔内へのエアロゾル流入を病態に応じて効果的に成就せしめる一つの方法として、ヴァイブレーションズ・エアロゾルの利用が考えられる。すでに数多くの製品が出ているが、日本光電製 Vibration QV-301W を用いた臨床的検討および基礎的検討が最後の 2 題である。

前者（児玉氏による）は、DKB エアロゾルの鼻腔、副鼻腔粘膜への沈着分布を、ジェット型、超音波型で対比して検討したものである。この種の実験を重ねてゆくことは、鼻・副鼻腔疾患に対する常套的臨床処置法の根本的再検討の必要性からみて、重要なことである。今回は中間結果とのことであるが、今後も研究の継続と成果が期待される。

後者（佐藤氏らによる）は、鼻副鼻腔想定ガラス腔模型を用いて、自然口入口部附近（模型）のエアロゾル粒子沈着動態を観察したものである。模型や圧その他 parameters の条件が種々関与するため、活発な質疑応答が展開されたが、これらの問題は、とても短時間内に結論を出せるべきものではなく、今後共この面に関心を持つ研究者が集学的、協力的に検討を続けていくべきものと思われる。